

救助の体験の話に戻る。1993年頃だったか、夏に剣岳で救助活動をしたとき、何と、運動靴の上から12本アイゼンでドスッと踏まれた。こんなことにさえも備えよう、と、そんな話をしよう。

あの年、お盆休みの剣岳一帯の残雪は異常に多かった。長次郎の科尔には5mを越える急な雪壁ができていて、長次郎谷に降りるのにロープがほしいほどだった。我々OWCCは6人くらいで三の窓にベースキャンプを構え、チンネやハツ峰VI峰のフェース群を登りまくって大いに楽しんでいた。そこに大阪府連の仲間から救助要請が飛び込んできた。S田労山の仲間Aさん（女性）が長次郎の科尔から長次郎谷上部の急な雪渓を下り始めて間もなく滑落し、姿が見えなくなったというのである。居合わせた大阪府岳連の方々も協力を申し出て下さり、約15名もの臨時救助隊が出来上がった。労山にも岳連にも熟達の救助隊員がいたので、(1)体制づくり、(2)班分けと搜索個所の分担、(3)搬送用スノーボード確保のため真砂沢小屋に3名派遣など、あつという間に段取りをした。

Aさんは、右岸の岩と雪渓のすき間いわゆるシュルンドに危なっかしく引っかかっておられた。細心の注意でロープを結び、雪に掘った大きなバケツに收容。スノーボードの到着を待つ。長次郎雪渓を見下ろした中川は驚いた。たった1名がえらい勢いでスノーボードを引き上げて登って来るではないか。その若者は、何と、登山靴ではなく長靴だ。カチカチの雪渓のスプーンカットにゴム長靴を上手に置き、走りあがって来られる。昔、石岡繁雄先生にお聞きした上高地の名案内人「常さん」の話が中川の脳裏に甦った。「中川さん、常さんは地下足袋で雪渓を走りあがったんだ」。

救助隊の中の有能な方々数名がさっそく走り下って合流し、スノーボードが救助隊に届いた。Aさんをスノーボードにくくりつけ、ロープ張り班、引き下ろし班、ロープ回収班の3班に分け、隊長の指揮号令のもとに、長次郎雪渓を下って真砂沢小屋めざして搬送作業が始まった。救助隊の中でも特に有能な方々は3つの班を全て補完して雪渓上を走り回る。ここで中川はまた驚いた。スノーボードをひとりで引上げて来られたあの若者は、その方々の2倍も3倍も動くのだ。スプーンカットに触先(へさき)を取られて右往左往するスノーボードの触先を左右に修正したり、走りあがってきてロープの速度を調節させたり、また下って行って触先をきちんと制御し直す。あとで聞いたら、サエキさんだという。立山ガイドのご子孫だ。生まれもって酸素摂取能力が高くオリンピック選手並みである。東大の中村純二先生から第1次南極観測隊でのサエキさん(オヤジさん?)のすごさを聞いた。雪の中に何かを紛失しても、極めて高い確度で見つけるサバイバル能力のおかげで南極観測は本当に助かったという。この強さなら、さもありませんと中川はつくづく思った。

引き下ろし班にいた中川がアイゼンで足を踏まれたのは16時頃か。この年は雪が多かったのでOWCCでは「運動靴とアイスパイルだけでは危険だ、軽アイゼンを持て」という号令が発せられた。他の会ではさらに安全を高めるため、冬の登山靴に12本アイゼンを装着した会員も多かった。中川の横でスリングを操作しておられたある方がなぜかバランスを崩され、中川を押し倒し気味に倒れかかって来た。彼は、何と、中川の足を運動靴の上から12本アイゼンでドスッと踏んでしまったのだ。中川は目をつぶり、彼と中川は動きを止めた。目を開けて互いの顔をじっと見つめあう。アイゼンは爪が全部運動靴に入っていた。中川はそっと指を動かしてみる。頼む・・・ここでクライマー生命を失いたくない。指よ、動いてくれ・・・。彼がそっとアイゼンを運動靴からぬいた。痛くない！！信じられなかった。アイゼンの爪は、中指と薬指の間にはまっていたのだった。運動靴には、ぱっくり穴があき、足首あたりにアイゼン前爪の深いひっかき傷が残った。

真砂沢小屋にAさんを運び込んだら、もう暗くなっていた。OWCC会員は幕営用具を何も持っていなかったの、真暗の長次郎雪渓を、それこそクタクタで登った。A木、M田、N川が三の窓ベースまで登りついたのはもう24時？N井・Xは熊の岩で登行をあきらめ、ビバークとなった。